

アジアにおける自立・生計支援プロジェクト 2018年 UNHCR 活動報告書(抜粋)

現場からの声

インド ファーハット(Farhat)さんの話

「ILHAM はただのビジネスでなく、私の人生のなくてはならないものです」



2014年、夫を亡くしたファーハットさんは3歳の息子と二人でアフガニスタンからインドに逃れてきました。インドに着いてからはほかの難民と同じように、家族の生活を維持することや、強制移動のトラウマと向き合うなどの試練に直面しました。

2015年9月、彼女はシングルマザーが主体の難民グループのメンバーとなり、インドのニューデリーで行われた展示会にてアフガン料理の屋台を出しました。そこで大反響を呼び、グループの名前を「ILHAM」(ダリー語で希望の光)と名づけ、本格的な事業化に乗り出しました。彼女たちは UNHCR の研修で培ったスキルを活かし、新たな屋台設置場所の開拓や、マーケティング、新規の顧客開拓を行いました。

現在、ILHAM はケータリング事業に成長しました。事業は黒字で、2018年にはインド政府当局からライセンスを取得し、正式に事業として登録されました。ILHAM の顧客は多様で、政府、学校、そして一般の個人からもオンラインで注文を受けています。この事業の成功もあり、ファーハットさんは家族の教育や医療にかかる費用を支払うことができます。ILHAM の成功は、ファーハットさんの経済的自立を可能にしただけでなく、トラウマを乗り越え、周りの難民女性やシングルマザーをも勇気付けています。

イラン マルジエ(Marzieh)さんの話

「収入を得るだけでなく、自分の尊厳も取り戻すことができました」



マルジエさんは(33歳)は、難民2世としてイランで8人の兄弟姉妹の大家族に生まれました。2001年に父親が他界してからは、父親の収入で生活していたマルジエさんの家族は経済的な困難に陥り、マルジエさんも家計を立て直すために立ち上がりました。

2018年にマルジエさんは難民女性の自立を促すことを目的にした衣服のデザインコースに合格しました。このコースは女性たちが自分の家にいながらビジネスを始めることが可能になるように設計されています。受講者には仕立てやデザインのスキル、起業に向けたアドバイス、さらにビジネスを始めるための設備投資のための資金が与えられました。

コース修了後、マルジエさんは衣服の仕立てビジネスを始め、さらに他の難民女性たちにドレスのデザインを教え始めました。現在、ビジネスは黒字で、マルジエさんは今後のさらなる成長に向かって邁進しています。「できれば大学に入り、もっと衣服デザインの知識を身につけたいです。そして、他の難民の方々にも私の知識を共有し、彼らが自立するためのスキルの一つにもなれば」と語ります。

マレーシア アブディナジャ(Abdinasir)さんの話

「ビジネスを始める自信ができました」



アブディナジャさん(21)はソマリアから逃れてきた難民です。仕事があった頃は、月に125ドルの収入がありました。アブディナジャさんは UNHCR が行っている、起業に向けたマイクロ・エンタープライズ・プログラム研修に参加し、5ヶ月間の研修期間で、ビジネスの認可をとるプロセスやマーケティング、経理などについて学びました。さらに、仕立て屋ビジネスを始めるにあたって中古のミシンを買うために、500ドルの補助金も得ることができました。

2018年12月、アブディナジャさんは研修を修了。その後、ミシンの使い方を学び、自分の家の近くで、他の店から簡単な服の直しを受託する小さな仕立て屋を始めました。

今では利益が月250ドルになり、新しいミシンを購入したことで仕立ての仕事の幅も広がりました。アブディナジャさんの家族の収入も以前の3倍である、月に約375ドルになりました。アブディナジャさんがビジネスを始め、徐々にその幅を広げていったことで、安定した収入を手に入れることが出来るようになったのです。

ネパール ボンパ(Bhompaa)さんの話

「私の仕事は、家計を支え、さらに家族の人間らしい生き方を可能にしています」



現在19歳のボンパさんはネパールにある難民キャンプで暮らすブータン人家庭に生まれました。彼は家族と一緒にジャパやモランなどの地域の仮設住宅や難民キャンプを渡り歩きながら育ちました。19歳になったボンパさんは結婚し、最愛のパートナーである妻、そして祖父母と叔母と暮らしています。

彼は初等教育を修了することができましたが、経済的な問題からその後の教育を受けることができませんでした。また、彼の家族は政府機関からの支援に完全に依存していたため、その支援がなくなった途端、最低限の生活を続けていくことが困難になりました。

ボンパさんは2018年6月にUNHCRの職業紹介プログラムを通じての近所の自転車組立工場で職を得ることができました。今では、月額8,000ネパールルピー(80米ドル)以上の収入を得ています。「仕事をもらえたことで、私は家計を助け、家族を支えることができるようになりました」とボンパさんは語ります。

パキスタン サマール(Samar)さんの話

「衣服仕立てトレーニングを受け、家の中で起業をすることが出来ました」



サマールさん(40)は、パキスタンにあるバラカイ難民キャンプで、3歳から17歳の8人の子どもたちと暮らすアフガン難民です。夫は日雇い労働者で、家族を養うために必要な安定した収入がありません。

2018年9月にサマールさんは、高度な仕立ての技術と起業について学ぶ、技術開発プロジェクトに参加しました。以前から衣服の仕立てに強い興味を持っていましたが、自信がなく、挑戦出来ずにいました。研修を終えた後、サマールさんは支給されたミシンを使って、自分の家で仕立てのビジネスを始めました。顧客を獲得するために近所の家を訪ね、値引き価格を提示し、自分のビジネスの宣伝をしました。そんな努力の甲斐もあり、地元の女性や

親戚から徐々に注文が入るようになりました。顧客からは、サマールさんのクリエイティブなデザインやコストパフォーマンスの良さ、さらに丁寧な裁縫技術が評判になっています。

現在サマールさんは月約60米ドルを稼ぎ、家族の生活を支えています。子どもたちには本や制服、通学かばんを買うことができ、毎日楽しく学校に通っています。「研修を通して自分に自信ができました。将来は仕立て屋と平行して、家で女性服のお店を開きたいです」と、サマールさんは自分の目標について話します。